

クリノリン・ドレス（1860年代）のスカート・パターンの特徴

塚本和子*

The Characteristics of Ten Skirt Patterns of 1860s Crinoline Dresses

Kazuko Tsukamoto

要 旨 19世紀の婦人服、クリノリン・ドレスについて、文化学園博物館において、縫製の調査、パターン採取を中心に、実物資料の調査を継続して行っている。今回はスカート・パターンの特徴について考察した。1860年代のデイドレス実物資料7点、文献をもとに製作した1860年代のドレスの複製作品3点、計10点のパターンを整理し、まとめた。ウエストがより細い方が良いとされていた時代であったが、ウエストの出来あがり寸法が50 cm代のドレスは10点の内1点のみで、他の9点は60 cm代であった。スカートを製作するために必要な布地の使用量は、スカートの大きさや広がり、シルエットが変化しても、工夫して裁断されているため、使用量に大きな影響は見られなかった。当時のスカート作りは、スカートの丈と縫い代分を見積もり、布地を裁断、スカートの広がりを考慮して、布地の中央に傾斜をつけて裁断、各縫い目を縫合、そして形を見ながらプリーツをとり、作られたものと推察した。従って、パターンを作り、布地を裁断する現在の方法とは異なる手順で製作していたものと考えられる。

キーワード クリノリン・ドレス (Crinoline Dress) スカート・パターン (Skirt Pattern) 実物資料 (Original Dress)

I. はじめに

文化学園博物館所蔵の実物資料の調査を継続して行っている。現在は1860年代のクリノリン・ドレス、特にデイドレスの縫製およびパターン採取を中心に実施している。

すでに、1860年代のクリノリン・ドレス6点の縫製の特徴について報告した¹⁾²⁾。

今回は実物資料6点に加え、過去に同博物館において、パターン採取した実物資料1点、計7点と Janet Arnold 著『Patterns of Fashion Vol 2 1860-1900』(以下文献1と省略する)に掲載されているドレス3点、合計10点のスカート・パターンの特徴について考察した。

文献1に掲載されているドレス3点については、文献1の縫製図と縫製に関する説明文をもとに複製した。複製するにあたり、Nancy Bradfield 著『Costume in Detail 1730-1930』を参考にして、小松氏³⁾の指導のもとに製作したものである。

II. クリノリン・ドレスのスカート

クリノリン・ドレスの特徴はスカートにあり、1848年～1870年に出現したスタイルである。クリノリン・ドレスが流行した間、スカートのシルエットは少しずつ変化した。スカートのシルエットは3期に分けることが出来る。これは、丹野郁氏の文献でも述べられている⁴⁾。

スカートの形状については、前期は釣鐘状、中期は漏斗を逆さにした形、後期はスカートの大きさが最も大きくなり、前面が平らで、後ろ

* 本学助教授 被服造形学

が大きく張り出していた。

1860年代の10年間のシルエットは、前半は漏斗を逆さにした形、後半はスカートの大きさが最も大きくなり、前面が平らで、後ろが大きく張り出した形であった。

Ⅲ. 研究 方 法

研究方法は以下の通りとした。

- ①実物資料はスカートのシルエット、装飾を中心に観察し、デザインの特徴をまとめる。
- ②製作した複製作品のデザインの特徴は、文献1に掲載された文章を把握し、出来上がった作品を観察し、まとめる。
- ③実物資料から採取したパターンの特徴をまとめる。
- ④複製作品は、文献に掲載されたパターンと実際に製作に使ったパターンの両者から特徴をまとめる。
- ⑤実物資料のパターンと複製作品のパターンの特徴を表にする。10点のパターンを比較する。
- ⑥①から⑤をもとに、1860年代のスカート・パターンの変化、パターン作成方法について探る。

Ⅳ. 調 査 結 果

1. 実物資料のスカートのデザインの特徴

調査した資料は図1, 2, 3, 4, 5, 6, 7の7点である。特徴は以下の通りである。

1) 実物資料1 (図1)

博物館の資料によると、1865-68年頃のイギリスのものである。紫と白のストライプのツーピース・ドレスで、ボディ、スカートにベストを組み合わせたデイドレスである。

スカートが8枚接ぎで、漏斗を逆さにしたシルエットである。左斜め前明きで左前ウエストに時計ポケットがある。右斜め前の縫い目にシームポケットがある。

スカートの裾に紫と白の太いブレードが装飾

されている。

2) 実物資料2 (図2)

1860年代のもので、ヨーロッパまたはアメリカのものである。ロイヤルブルーのツーピース・ドレスで、ボディ、スカートに飾りベルト、付け衿、コルセットを組み合わせたデイドレスである。

8枚接ぎで、前面がほぼ平らで、後ろが張り出したシルエットである。スカートには装飾はつけられていない。

3) 実物資料3 (図3)

1860年代のもので、濃いブルーとグレーの細い横縞のツーピース・ドレスで、ボディ、スカートにベルトがついたデイドレスである。

8枚接ぎで、全面はほぼ平らな状態で、後面が張り出したシルエットである。スカートには装飾はついていない。

4) 実物資料4 (図4)

1860年代の資料で、ヨーロッパまたはアメリカのものである。ブルーのツーピース・ドレスで、ボディ、スカートにベルトがついたデイドレスである。

8枚接ぎで、前面はほぼ平らな状態で、後面に張り出したシルエットである。装飾はスカートの斜め前、ベルトにポーとくるみボタンをあしらったセルフブレードがつけられている。

5) 実物資料5 (図5)

1865年頃のイギリスのものである。緋の草花の織り模様のワンピース・ドレスである。

8枚接ぎで、前面は平ら、後面は大きく張り出したシルエットである。後ろ中心の縫い目はコーデットシームである。縫い目の中にあるコードにより、後ろへ張り出し、スカートの形を整えている。

6) 実物資料6 (図6)

1865年頃のアメリカのものである。ブルーの無地のワンピース・ドレスで、デイドレスとして着用されていたものである。

スカートは前面の膨らみが少なく、後ろに大きく張り出したシルエットである。スカート全体にリフォームによる多くの接ぎ目がある。リ



前面 左側面 後面

图1 实物资料1 (文化学园博物館所蔵)



前面 左側面 後面

图2 实物资料2 (文化学园博物館所蔵)



前面 左側面 後面

图3 实物资料3 (文化学园博物館所蔵)



前面 左側面 後面

图4 实物资料4 (文化学园博物館所蔵)



前面 左側面 後面

图5 实物资料5 (文化学园博物館所蔵)



前面 左側面 後面

图6 实物资料6 (文化学园博物館所蔵)



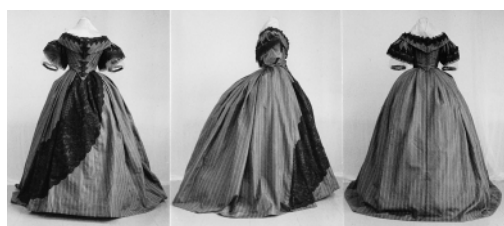
前面 左側面 後面

图7 实物资料7 (文化学园博物館所蔵)



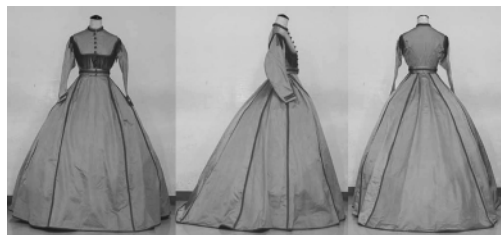
前面 右側面 後面

图8 複製作品1



前面 右側面 後面

図9 複製作品2



前面 右側面 後面

図10 複製作品3

フォーム前は接ぎの状態から、1840年代に流行した3段のフラウンスがついた、ヴォラン・スカートであると推測した。

装飾は、スカートの裾にプリーテッド・フリルの装飾が施されている。

7) 実物資料7 (図7)

1860年代のもので、グリーンの無地のワンピース・ドレスで、デイドレスとして着用されていたものである。

前面は平らな状態で、後面は後ろへ大きく張り出したシルエットである。

装飾はスカートの裾に、大小組み合わせたスカラップがあり、スカラップの端はパイプドエッジで始末してある。

2. 複製のスカートのデザインの特徴

文献1を基に製作した複製作品は図8, 9, 10の3点である。

1) 複製作品1 (図8)

文献1によると、ロンドン博物館所蔵のオリジナル作品で、淡いシルバークレーのタフタに明るい藤色、暗いライラック、モスグリーンの小花模様である。装飾用別布にチャコールグレーのタフタが使用されていた。しかし、当時と同じ素材を入手することは難しく、使用した素材は、文献1に記載されているものとは異なり、市販されているものの中から装飾用別布との配色を考慮して選んだ。

ボディとスカートのツーピース・ドレスで、デイドレスとして着用されていた。スカートのトレーンは少なく、裾にプリーテッド・ゴ

デットがあり、ゴデットにボックスプリーツをとった装飾用の別布が挿入してある。

2) 複製作品2 (図9)

服種はイブニング・ドレスで、ボディとスカートのツーピース・ドレスである。

文献1ではピンクと黒のストライプのタフタとあったが、同色同柄を入手することが出来ず、製作したドレスは茶と白のストライプのタフタを用いた。

スカートの前面全体に斜めに幅広い黒のレースがついている。

3) 複製作品3 (図10)

デイドレスとして着用されていたワンピース・ドレスである。

文献1では明灰色で、装飾はブルーとあったが、作品はブルーのサテン地に濃いブルーの布地を装飾とした。

スカートの各縫い目にダブルパイピングの装飾がある。

3. 各パターンの特徴

図11, 12, 13, 14, 15, 16, 17は実物資料より採取したパターンである。図18, 19, 20は製作した複製作品のパターンである。

1) 実物資料1 (図11)

スカートの特徴は前後中心輪裁ちの8枚接ぎである。24本のソフトプリーツと、カートリッジプリーツがある。パターンの形は長方形である。ウエスト寸法に合わせプリーツをとり、作られている。

2) 実物資料 2 (図12)

前後中心輪裁ちの 8 枚接ぎでわずかにトレーンを曳いている。斜め前から後ろにかけて 6 本のソフトプリーツと、カートリッジプリーツがある。パターンは後ろ中心が長方形で、他のパーツは台形の形である。

3) 実物資料 3 (図13)

前後中心輪裁ちの 8 枚接ぎでわずかにトレーンを曳いている。斜め前から後ろにかけて

16本のソフトプリーツがある。パターンの形は後ろ中心が長方形で、他のパーツは台形の形である。

4) 実物資料 4 (図14)

前後中心輪裁ちの 8 枚接ぎ、トレーンを曳いている。10本のソフトプリーツと、後ろ中心のカートリッジプリーツがある。パターンは後ろ中心が長方形で、他のパーツは台形の形である。

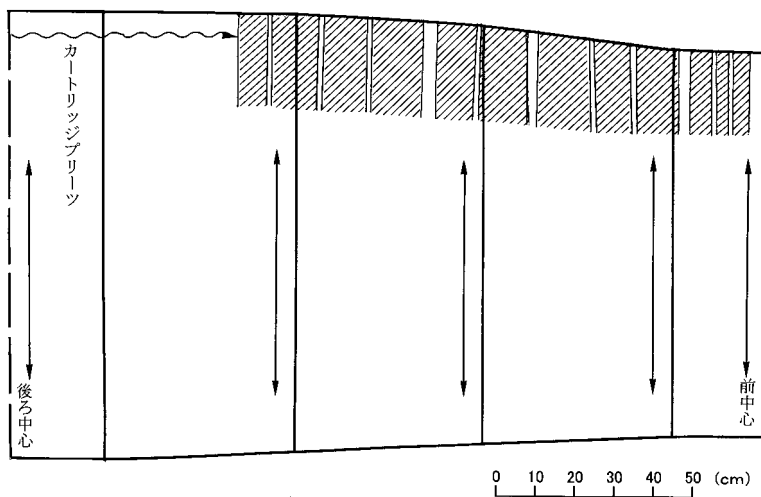


図11 実物資料 1 のスカートパターン

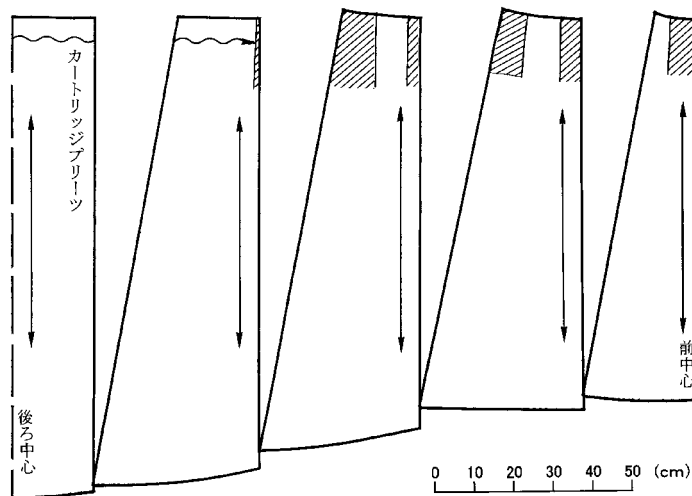


図12 実物資料 2 のスカートパターン

5) 実物資料 5 (図15)

前後中心に縫い目があり、8枚接ぎである。後ろ裾はトレーンを曳いている。後ろ中心縫い目はコーデットシームである。プリーツは斜め後ろの4本のみである。いずれのパターンも台形の形で、ウエスト周辺で縫い目線がカーブ

している。ウエスト周辺の細い線は現在のスカート形の前のパターンである。リフォームによりウエスト周辺が変形したものである。

6) 実物資料 6 (図16)

前後中心輪裁ちの10枚接ぎである。裾はトレーンを曳いている。スカートのプリーツは脇

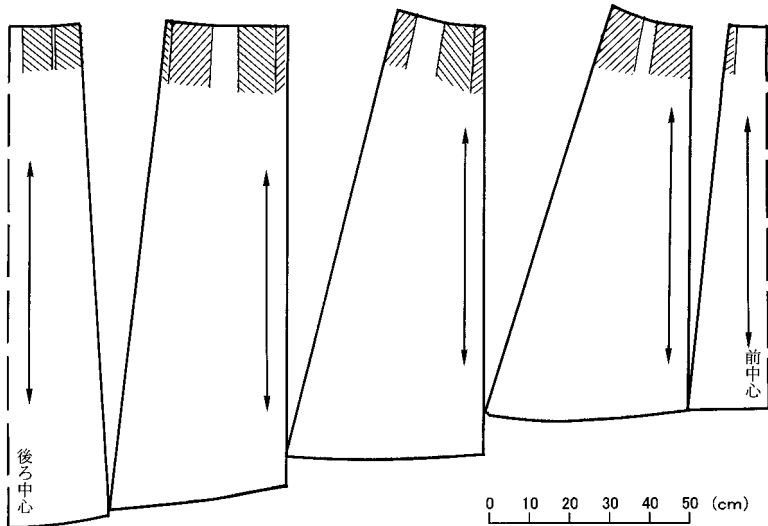


図13 実物資料 3 のスカートパターン

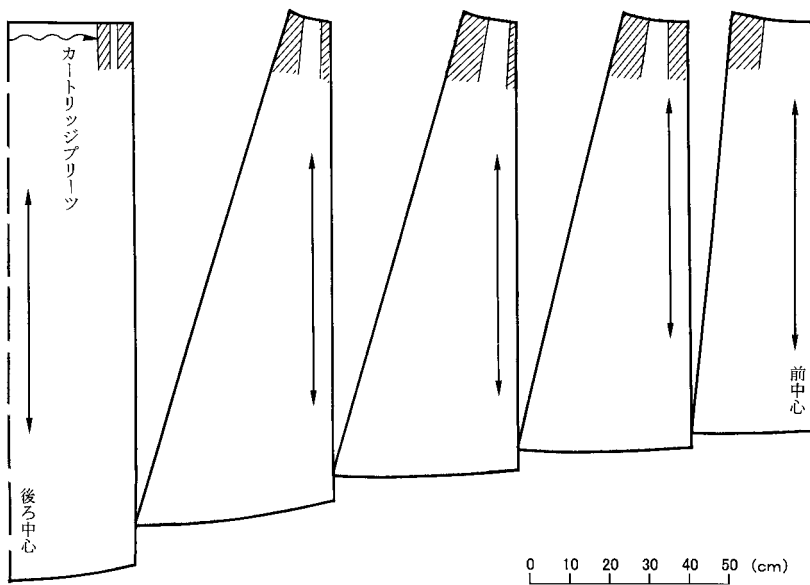


図14 実物資料 4 のスカートパターン

にとられた2本のプリーツとり，後ろ中心にカートリッジプリーツをとっている。後ろ中心

は長方形で，他のパーツは台形の形である。資料は2度以上リフォームをした跡が確認

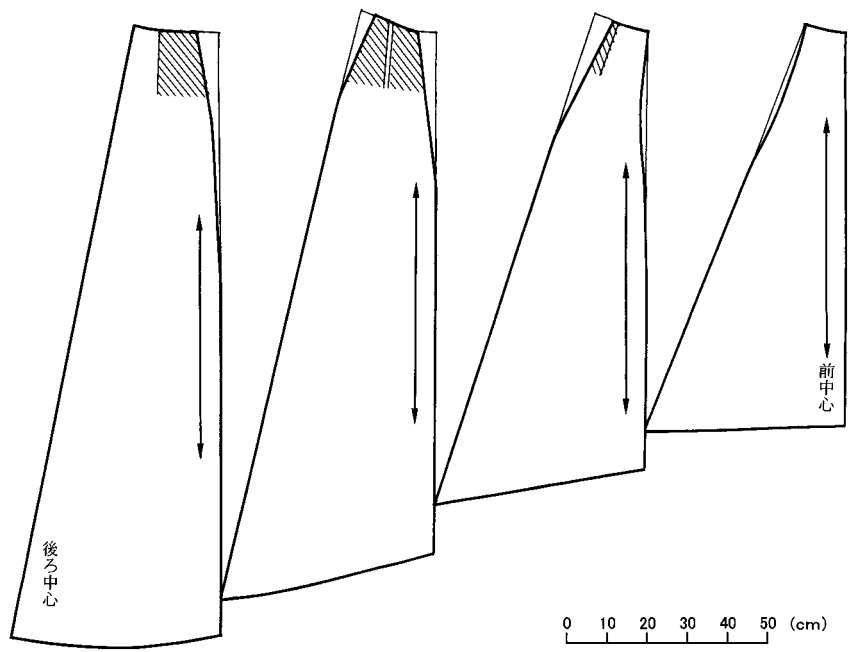


図15 実物資料5のスカートパターン

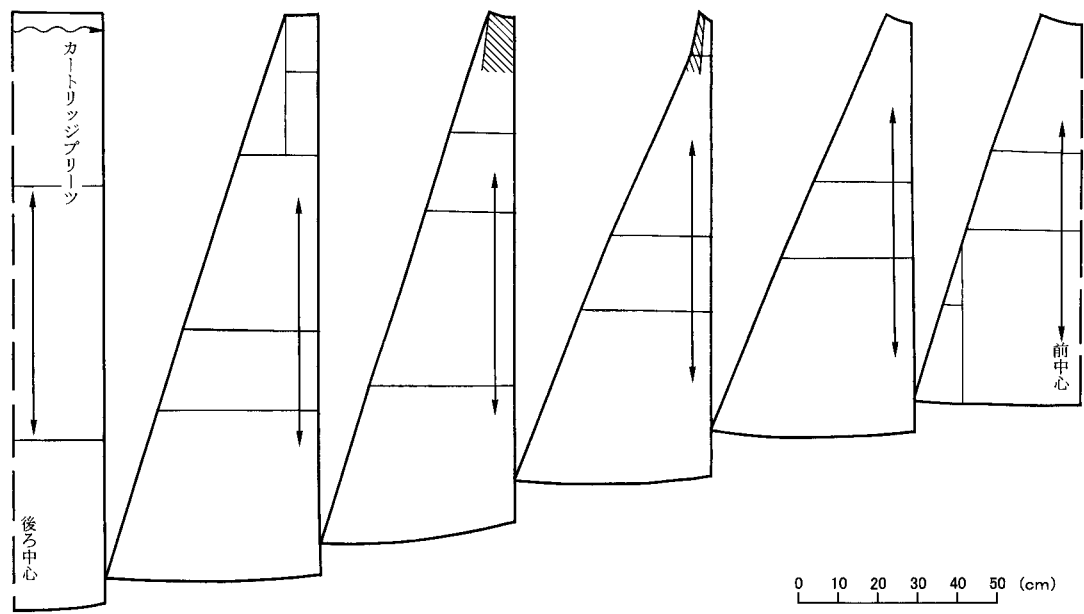


図16 実物資料6のスカートパターン

出来た。パターンにある細い線は布地の接ぎ目である。接ぎ目の状態から、現在のドレスの前はヴォラン・スカートであると判断した。

7) 実物資料7 (図17)

前後中心輪裁ちの10枚接ぎ、トレーンを曳いている。プリーツは後ろ中心のカートリッジ

プリーツのみである。パターンは後ろ中心は長方形で、他のパーツは台形の形である。裾は大小を組み合わせたスカラップである。

8) 複製作品1 (図18)

前中心輪裁ちで、後ろ中心は縫い目があり、7枚接ぎである。ウエストに28本のソフトブ

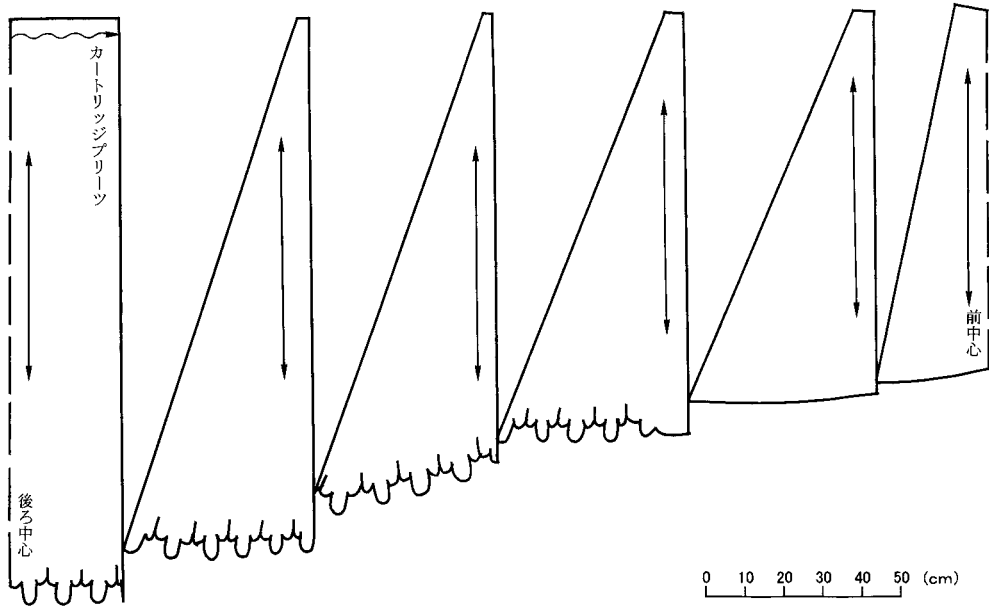


図17 実物資料7のスカートパターン

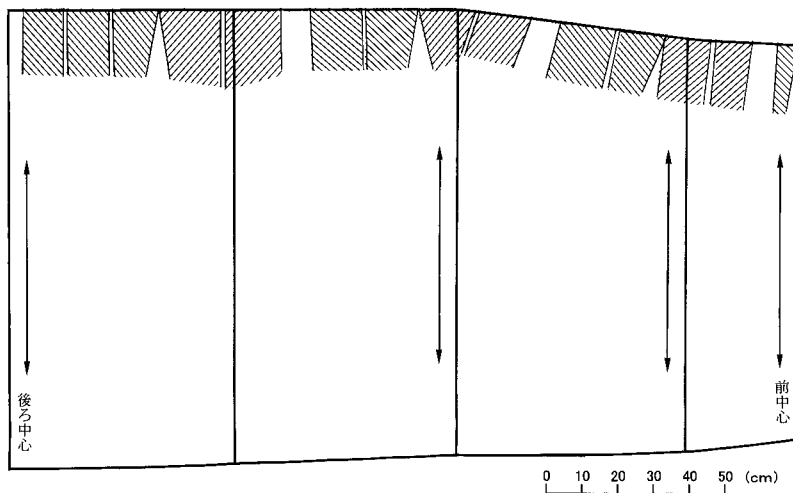


図18 複製作品1のスカートパターン

プリーツがある。パターンは長方形である。

9) 複製作品2 (図19)

前中心が輪裁ちで、後ろ中心は縫い目があり、9枚接ぎである。28本のソフトプリーツがある。後ろ中心と隣のパーツのパターンは長方形で、他のパーツは台形の形をしたパターンである。

10) 複製作品3 (図20)

前後中心輪裁ちの8枚接ぎで、トレーンを曳いている。全部のパーツが台形の形である。しかし、このパターンの場合、後ろ中心のパーツの台形の形が異なるのが特徴である。

4. パターンの比較

10点のパターンの相違点、共通点等を把握

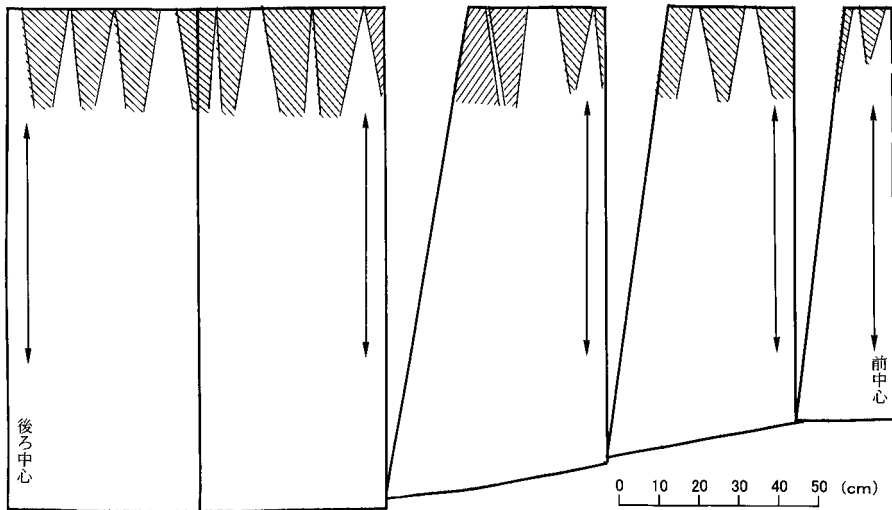


図19 複製作品2のスカートパターン

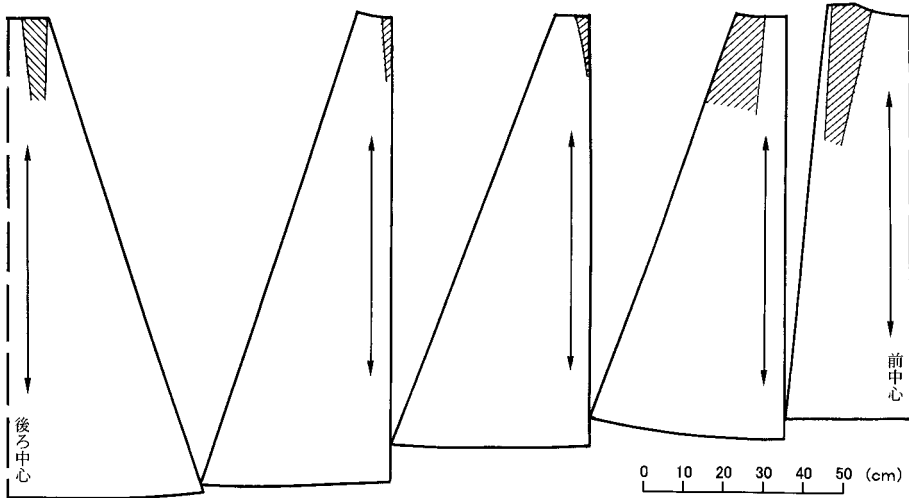


図20 複製作品3のスカートパターン

し、1860年代のパターンの特徴を探るために表にまとめた。(表1)

1) 比較項目の内容について

調査した項目の内容は次の通りである。

- ①前中心丈：着用者のウエストの高さを推察し、さらに着用者の身長を推測する。
- ②後ろ中心丈：前中心丈と後ろ中心丈の差からスカートのトレーンの長さを知る。
- ③前後の丈の差：スカートのシルエットとトレーンの長さの関係を知る。
- ④裾の長さ（蹴回し寸法）：スカートのシルエットと裾の長さに関するかを見る。
- ⑤ウエスト出来上がり寸法：ドレスの着用者のウエストサイズを知る。
- ⑥プリーツの総分量：分量とシルエットとの関係を探る。
- ⑦プリーツの本数：プリーツの総分量と同様にプリーツの数がシルエットに関するかを見る。
- ⑧カートリッジプリーツの有無：有無により、年代、スカートのシルエットとの関係を知る。
- ⑨構成枚数：シルエットと構成枚数に関するかを見る。
- ⑩縫い目の傾斜角度：ゴアードスカートの縫い目はたて布目とバイアスの布目の縫合であるが、バイアスの角度とスカートのシルエットとの関係を見る。角度は図21のように計測する。

⑪布地幅：スカート・パターンの中に、布幅いっぱい使用したパーツがある。ドレスに使用された布地の幅を調べる。

⑫使用量：スカート・パターンの裁ち合せ図を実際に描き、スカートに使用した使用量を割り出す。スカートのシルエットと布地の使用量との関係を見る。

2) 比較した結果について

スカート・パターン10点を比較した結果は以下の通りであった。

- 1860年代前半はトレーンの長さがあまりなく、1860年代後半はトレーンが長くなっている。実物資料1は17 cm、実物資料7は60

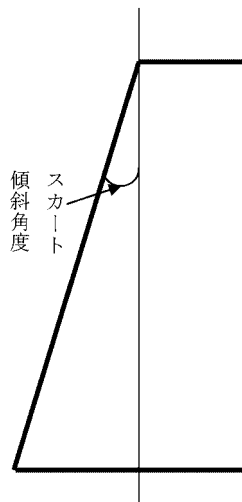


図21 縫い目傾斜角度の計測方法

cm であった。

- スカートの蹴回しの長さについては、短かったのは実物資料2の372 cm、長かったのは実物資料6の561 cm であった。
- ウエストの出来上がり寸法については、一番細かったのは、実物資料5の55 cm、一番大きなサイズは実物資料7の69.2 cm であった。
- 総プリーツ量が一番多かったのは複製作品1の402 cm、一番少なかったのは実物資料7の39 cm であった。
- プリーツの本数が一番多かったのは、複製作品1, 2の28本であった。実物資料7の場合は、ソフトプリーツはなくカートリッジプリーツのみであった。
- カートリッジプリーツは10点の内、5点にあり、すべてドレスの後ろ中心に集中していた。
- スカートの構成枚数8枚接ぎが多かった。実物資料6, 7は10枚接ぎであった。
- スカートの縫い目の傾斜角度は、実物資料1と複製作品1は傾斜がなく、実物資料6, 7の各縫い目の角度が大きかった。
- 布地幅は54~75 cm で、50 cm 代は3点、60 cm 代は3点、70 cm 代は4点であった。
- 使用量は720~1050 cm であった。700 cm

表1 スカートパターン各部位の計測

調査項目		パターン	① 前中心丈 (cm)	② 後ろ中心 丈 (cm)	③ 前後の 丈の差 (cm)	④ 裾の蹴回 しの長さ (cm)	⑤ ウエスト 出来上が り寸法 (cm)	⑥ プリーツの 総分量 (cm)	⑦ プリーツ の本数 (本)	⑧ カートリッジ プリーツの 有無	⑨ 構成枚 数 (枚)	⑩ 縫い目の傾斜角度 後ろ⇄前 (°)	⑪ 布地幅 (cm)	⑫ 使用量 (cm)
博物館資料 複製作品														
資料1	1865～68年 頃 イギリス		100.0	117.0	17.0	406.0	66.0	340.0	12	有	8	0・0・0・0・0	75.0	950.0
資料2	1860年代 ヨーロッパ または アメリカ		99.5	125.7	26.2	372.0	67.0	130.0	3	有	8	0・13・10・12・11	67.0	770.0
資料3	1860年代		98.0	129.0	31.0	398.0	64.4	145.0	16	無	8	3・7・19・17・6	58.0	970.0
資料4	1860年代 ヨーロッパ または アメリカ		106.7	14305.0	36.8	423.0	66.5	127.5	10	有	8	0・16・16・14・6	70.0	780.0
資料5	1865年頃 イギリス		101.0	160.0	59.0	434.6	55.0	42.0	4	無	8	12・14・18・21	58.0	860.0
資料6	1865年頃 アメリカ		99.0	155.8	56.8	561.0	67.0	56.6	2	有	10	0・18・18・24・24・20	64.0	820.0
資料7	1860年代		95.0	155.0	60.0	544.0	69.2	39.0	0	有	10	0・19・20・23・24・12	74.0	800.0
作品1	1861～3年 ロンドン博物館		114.5	135.0	20.5	464.0	62.0	402.0	28	無	7	0・0・0・0	68.0	960.0
作品2	1861～4年 イギリス		107.5	131.0	23.5	468.0	63.0	300.6	28	無	9	7.8.9.0.0	54.0	1050.0
作品3	1866～7年 イギリス		103.5	129.5	26.0	468.0	68.0	60.0	8	無	8	6.20.21.18.18	72.0	720.0

代は3点, 800 cm代は3点, 900 cm代は3点, 1000 cm代は1点であった。

5. 考 察

デザインとパターンについて整理し, まとめた。

- ウエストが細いほど, 良いとされていた時代であったが, 当時はウエストが細い女性ばかりではなく, ドレスのウエストの出来上がり寸法をみるとウエストサイズが大きな資料が多く, 50 cm代が10点中1点, 他9点は60 cm代であった。実際には, ウエストサイズが大きな女性がいたことが確認できた。当時のすべての女性のウエストが細かったとはいえないことがわかった。
- 1860年代前半は漏斗を逆さにした形のシルエットであったが, パターンの共通点はプリーツの本数が多く, 総プリーツ分量も多かった。後半はスカートの大きさが最も大きくなり, シルエットは前面が平らで, 後ろが大きく張り出した形であった。プリーツの本数, 総プリーツ分量ともに少なかったのが特徴である。特に実物資料7はカートリッジプリーツのみであった。
- 1860年代前半は漏斗を逆さにしたシルエット

トである。パターンの特徴は長方形のパターンを縫合し, ソフトプリーツの数を多くとり, 総プリーツ分量が300~400 cm, トレーンの長さはあまりなかった。

- カートリッジプリーツの有無は, 有が5点, 無が5点である。カートリッジプリーツの有無とスカートのシルエットとの関係はみられなかった。
- スカートの前中心丈は98~114.5 cmあり, 10点のパターンは100 cm前後が多かった。当時のドレスを着用していた女性の身長について推測を試みた。スカートの膨らみ分を考慮して, 10点の資料の着用者の身長は155~160 cm位の範囲であると思われる。1860年代の女性は, 比較的小柄であったのではないかと推察した。
- ソフトプリーツのとり方について, 各々のプリーツの分量にばらつきがあり, 規則性が見られなかった。プリーツのとり方は, ウエストベルトに前中心, 後ろ中心, 明き位置などの合印を印した後, スカートの形を見ながら, 適宜プリーツをとり, 作成したものと考えられる。
- 1860年代後半のパターンは, 長方形と台形の形をしたパターンの組み合わせが多く, 資

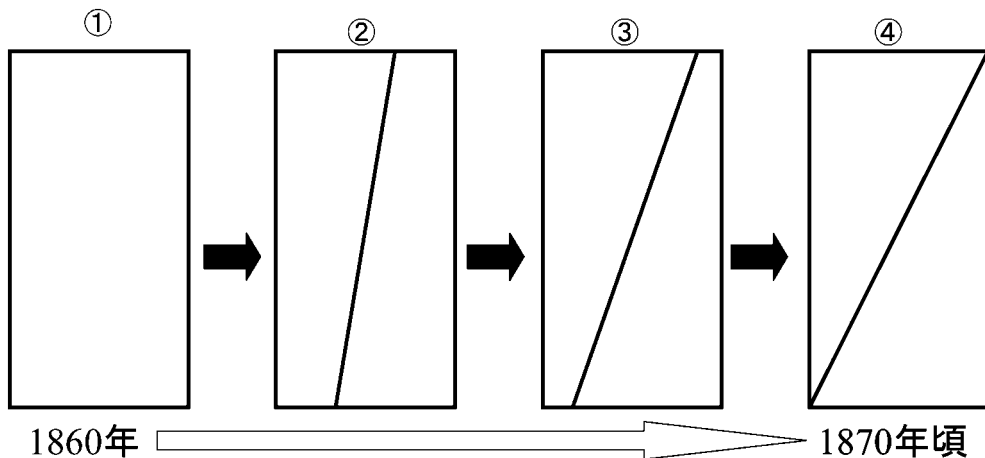


図22 スカートパターンの変化

料によっては台形のみを組み合わせた場合もあった。従って、各縫い目は、たて布目とバイアス方向の布目どうしが縫合されていた。現代ではこのような衣服作りはほとんど考えられない。布目方向が異なるもので縫合した場合、布地によっては色味や布地の光沢の状態が異なって見えることがある。以上の理由から、ほぼ同じ布目方向で縫合することが多い。当時は異なった布目で縫合することについて、あまり問題とされていなかったと思われる。

- スカートの製作方法は、各パーツが大きく、スカートのパターンはなかったのではないかと考えられる。スカートの丈と縫い代を見込み、布地を裁断し、各縫い目を縫合する。形を見ながら、プリーツをとるという順でスカートが製作されていたと推察した。
- 布地の裁断の傾斜角度については、10年間で図22のように変化していったものと推察した。実物資料1、複製作品1は①の裁断、実物資料6、7は④の裁断であった。前半は長方形の組み合わせで、シルエットの変化により、布地の中央を斜めに裁断し、台形の形にして、幅の広い方を裾にし、縫合した。後半になると図22④のように、しだいに傾斜角度は強くなった。
- 1860年代後半においては、スカートが大きく広がった。前半のスカートと比較したが、布地の使用量に大きな差が認められなかった。10点のスカートの使用量をみると、720 cm～1050 cmであった。図22の④のように裁断することにより、布地が節約されていた。裁ち合わせ時のバイアスに裁断する傾斜角度を大きくし、プリーツ分量を少なくすると、スカートの裾が大きく広がるが、布地の使用量に影響はみられなかった。
- 実物資料6は他の資料と比べ、スカートに接ぎが多い。少なくとも2度以上のリフォームが確認された。現在のドレスの形の前はボラン・スカートである。当時は繰り返しリフォームされ、着用されていたと思われる。

V. ま と め

パターンの特徴は、1860年代前半は長方形の組み合わせのゴアードスカートである。プリーツの本数、総プリーツ分量が300～400 cmである。後半は長方形と台形の形をしたパターンの組み合わせのパターンと変化していった。台形の形のパターンの縫い目の傾斜角度が徐々に大きく変わっていった。角度が大きくなることにより、プリーツ分量は少なくなり、スカートの裾が広がったシルエットへと変化した。

スカートのシルエットの変化と布地の使用量に影響は認められなかった。縫い目の傾斜角度を強くすることにより、裾の蹴回しの分量を多くし、布地の使用量を変えずにスカートの形を大きくするよう工夫していたものと考えられる。

スカートを作るためのパターンはなく、直接布地を裁断していたものと思われる。

博物館での調査した実物資料を図22の①から④の流れの順に並べてみると、実物資料1、2、3、4、5、6、7の順にパターンの形は変化していったものと考えることが出来る。

今回は、1860年代のスカート・パターンに焦点を当て、まとめた。実物資料調査と複製作品を製作することにより、1860年代のスカート・パターンの特徴、スカート作りの過程について、理解することができた。

今後さらに、19世紀の婦人服のパターン、縫製について実物資料を中心に調査を続けていきたい。

また、身頃のパターンの特徴については、すでに報告⁵⁾しているが、さらに調査し、多くのパターンを採取して分析し、当時の女性の体型の特徴について解明していきたいと考える。

本研究をまとめるにあたり、実物資料調査にご協力下さいました文化学園服飾博物館学芸室長道明三保子教授、並びに同博物館学芸員小宮真紀子氏心から感謝いたします。

注

- 1) 塚本和子：クリノリン・ドレスの縫製法—3体の実物資料調査より—，文化女子大学研究紀要第35集 pp. 1-15 2004
- 2) 塚本和子：クリノリン・ドレスの縫製技術—1860年代の実物資料調査より—，文化女子大学研究紀要第36集 pp. 9-23 2005
- 3) 小松氏は元文化女子大学教授小松正子である。主に「19世紀の西洋婦人服の複製に関する研究」をされ、著者の研究の指導者である。
- 4) 丹野 郁：『西洋服飾発達史』現代編，光生館，東京，日本 pp. 134-135 1967
- 5) 小松正子・塚本和子：クリノリン・ドレスのパ

ターンと縫製法について，文化女子大学研究紀要第19集 pp. 205-221 1988

参考文献

- 丹野 郁『西洋服飾発達史 現代編』光生館，東京，日本 1965
- 丹野 郁『西洋服飾史 図説編』東京堂出版，東京，日本 p. 100 2003
- Nancy Bradfield: *Costume in Detail, Women's dress 1730-1930*, London, Harrap Limited 1975
- Janet Arnold: *Patterns of Fashion Vol 2 1860-1900*, London, Macmillan Limited 1966
- Norah Waugh: *The Cut of Women's Clothes 1660-1930*, London, Faber and Faber Limited 1968